

岡内三眞 博士論文概要

ユーラシアの牧畜文化と農耕文化

ユーラシアは東西に帯状に広がる生態系から構成されている。牧畜民が移動、回遊する草原地帯、さらに農耕民の定住する丘陵、平野が河川流域に展開し、海洋漁労民が生活する沿海、島嶼部が海沿いに連なる。農耕に適した沖積平野では、鉱物資源は地中ふかく埋まっているために、平野部の銅資源を利用するのは困難であった。地表や浅い部位に鉱物資源が存在する山岳や丘陵、高原など牧畜民の生活するエリアこそが、開発初期には金属原料を収集、採掘できる限られた場所だったのである。

初期の銅器は、仰韶文化の紅銅を初現とする。自然界の純銅を採集し鍛打加工した紅銅にはじまり、銅や錫、鉛を加熱して高温で鑄造できるようになり、器種や生産量が増え分布地も拡大していく。やがて龍山文化の後半期には、銅に錫と鉛を配合した青銅を安定した技術で生産できるまでになった。そのご二里頭文化の段階に、土製の複合範による鑄造技術が開発されている。商、周の立体的で複雑な青銅器の製作技術は、二里頭文化後半にはじまる夏王朝の土製複合範技術の延長線上にある。

中原を除く 東北アジアの青銅器は、遼西地区での出現が早く、商から周初の北方産青銅剣と中原産青銅容器とが出土し、紀元前 1000 年を下らない。さらに東周代の中原産、北方産の青銅器が、各地の遺跡から出土する。吉林地区や朝鮮で出現する青銅器は、銅斧、銅ボタン、銅剣などで、前 670~600 年ころと推定できる。初期段階には、遼西や遼東産の青銅製品を輸入し、加工して使用した。

遼寧省林西県大井では、採鉱から鑄造まで一貫して青銅器製作をおこなっている。南山根遺跡の青銅容器や武器には、遼西地区の製品を多くふくみ、年代は前 770 年から前 670 年ころに相当する。

遼東や吉林地区の二道河子や新金双房などの斧鑄型は、春秋後期の前 6 世紀に、鄭家窪子の出土品は遼東独自の器物を含み、戦国前期の前 450 年ころに比定できる。ところで東北アジアは、おもに中原の青銅器製作技術を導入している。遼西地区では中原系鑄造技術をもった工人によって土製鑄型による鑄造が開始され、青銅器製作技術が一定の発展をとげた段階で、周辺地区の住民のあいだに技術が拡散していく。製作加工技術を徐々に習得していったあとが、出土した鑄型や青銅製品からよみとれる。

東アジアにおける青銅器生産段階を設定すれば次のようになる。

- 1) 東アジアでの銅器出現は仰韶文化にはじまり、鍛造による紅銅が主である。龍山文化になると、錫を配合した錫青銅技術が確立し、のちに銅、錫、鉛の青銅合金を鑄造している。
- 2) 二里頭Ⅲ期に夏王朝がはじまると、複合範による容器の爵が作られ、商（殷）の青銅容器につながっていく。
- 3) 中国東北部を含めた東北アジアに青銅器が出現するのは、商代（前 1500 年ころ）の時期である。製品は遼西に多いが、遼東にも分布する。

4) 遼西の青銅器生産は、東北アジアの青銅器の流通と使用とを促進させ、遼西周辺での需要と消費とがいつそう増大した。西周末（前 770 年ころ）までの初期段階は土製鑄型が多かったが、しだいに石製鑄型に替わる。

5) 春秋中期から戦国前期初頭までの間に、東北アジアの各地で主に石型による青銅器の鑄造がはじまる。

6) 戦国前期から戦国後期は、東北アジアの青銅器文化が高揚し、西は遼西の草原から東は朝鮮東部の沿岸まで、各地で多種多様な青銅器を製作した。

7) 戦国後期を境に青銅器は鉄器へ替わっていく。鉄への移行現象は中原に起源し、東へとおよんだ。遼西、遼東では、戦国後期に転換がはじまり、秦末には鉄器へと交替している。朝鮮では戦国後期から転換がはじまり、西漢前期にはほぼ完全に鉄器へ移行した。

長く栄えた東アジアの青銅器文化は衰退し、鉄器文化が日毎に伸長し、発展していく。

東北アジアの青銅器製作技術

東北アジアの青銅製品は、遼西地区での出現が最も早く、遼寧省凌源県海島営子、喀左県北洞村、同山湾子、克什克騰旗天宝洞、河北青竜抄道溝、北京昌平白浮村などで、商から周初の中原産青銅容器、北方産の青銅剣が出土する。保有年代を考慮しても、紀元前 1000 年をさがらない。年代の順をおって西周代の中原産と北方産の青銅容器や武器が、寧城県南山根、朝陽県魏営子などから出土し、ひきつづき東周代の中原産、北方産の青銅器が喀左県南洞溝ほか各地から出土している。また、商代の銅刀が遼寧省撫順市で出土しているため、遼東地区まではその余波が及んでいる。

まず、遼西地区の南山根から出土した青銅容器や武器には、明らかに遼西地区産の特色を備えた器物がある。その年代は、西周後期の前 880 年から前 770 年に相当する。また遼寧省林西県大井では、採鉱から鑄造まで一貫して青銅器の製作が行なわれている。青銅容器の土製鑄型があり、遅くとも春秋初の前 770 年を下らない。両者とも発達した様相を呈しているため、遼西地区での青銅器製作の開始は早まる可能性がある。

吉林や朝鮮地区で出現する青銅器には青銅容器がなく、銅斧、銅泡、銅剣などがある。初現年代は、紀元前 770 年～紀元前 600 年頃と推定する。初期段階には、遼西や遼東産の遼寧式銅剣など製品を搬入し、舶載品を使用している。遼東や朝鮮、吉林地区では採鉱址、精錬址などの遺構は未発見である。石製鑄型でみると、二道河子や新金双房などの銅斧鑄型は、春秋後期、紀元前 6 世紀にまで遡る可能性が高い。出土した青銅製品をみると、鄭家窪子の遺物には、遼東地区独自の器物を含んでいる、その年代は戦国前期、紀元前 450 年頃に比定してよい。鄭家窪子例では先行期間があると考えられるので、遼東地区での青銅器の鑄造開始は、春秋後期と想定できよう。

朝鮮地区での鑄造開始年代は、いまだ明確ではない。石製鑄型でみると、松菊里や永興邑出土の銅斧鑄型、孟山出土の多鈕鏡鑄型などは、相対年代では古く位置づけら

れ、紀元前 450 年代を中心とする戦国前期に相当する。AⅡ式銅剣を朝鮮製とみると、やはり戦国前期の期間内に納まる。そこで朝鮮地区では、紀元前 450 年頃から紀元前 400 年までの間に、青銅器を鑄造しはじめたとみなしておく。

では東北アジアにおける製作技術の変遷と系譜とは、どのように進んだか。

東北アジアはおもに、中原の青銅器製作技術を導入した点は、先行期の輸入青銅製品の主体が中原産であった事実から、類推できる。

まず遼西地区で、中原系鑄造技術をもった工人によって、土製鑄型を用いた鑄造が開始される。あまり時をおかずに、小型器物を鑄造する石製鑄型を使用した状況が、夏家店の斧や連珠形飾りの石製鑄型から知られる。そして遼西地区の工人たちによって、青銅器製作技術が一定の発展をとげた段階で、周辺地区に技術が拡散してゆく。それまで周辺地区の遼東、朝鮮、吉林地区の人々は、中原や遼西地区産の製品を舶載、輸入して使用し、青銅器の消費地であった。やがて周辺地区でも青銅器製作の必要性が高まり、各地の人々は徐々に技術を導入していった。製作技術を着実に習得したあとが、出土青銅製品から読みとれる。

ところで遼東地区の人々が青銅器をつくりはじめた時期には、遼西地区では土型、石型がともに使われていた。そのため遼東地区では、両者を一緒に導入したが、小型器物を鑄造するには石型が主に使われた。

朝鮮地区でも、最初は石製鑄型による鑄造技術が導入されたふしがある。初期段階の青銅生産品に、土型でなければ作れないという遺物は存在せず、土製鑄型もまだ未発見である。工人たちが遼東地区からとり入れた鑄造技術は、石型を主とする方法であったため。遼東地区は隣接する遼西地区が土型、石型の盛行する地域であったのに対し、朝鮮地区は隣接する遼東、吉林両区とも石型が卓越する地域であった。そこに青銅器生産初期段階の遼東地区と朝鮮地区の差が存在する。朝鮮地区の土製鑄型は、石製鑄型の鑄造法よりも遅れ、有文青銅器の鑄造段階で導入された。蠟原型法は、遼東地区から戦国前期の紀元前 450 年前後に導入されている。

東北アジアの技術系譜をみる資料には、銅斧、銅剣、銅矛、銅鏃などがあるが、ここでは有文青銅器をとりあげよう。

有文青銅器の初現は、遼西地区である。遼寧省朝陽十二台営子、喀左南洞溝、錦西烏金塘などで、有文青銅器が出土している。その年代は、春秋中期から戦国初、暦年代にあてれば紀元前 600 年から紀元前 450 年頃の時期である。遼東地区では、沈陽鄭家窪子、旅大市崗上墓、樓上墓で有文青銅器が出土している。年代は、戦国前期から戦国後期はじめにかけてで、紀元前 450 年ごろから紀元前 350 年ごろ相当する。朝鮮地区の有文青銅器は、朝鮮の南部地域に分布し、槐亭洞、東西里、南城里、大谷里、入室里などで製品が出土している。その年代は、戦国後期から西漢初の時期で、紀元前 350 年ごろから紀元前 220 年にかけての時期である。おそい

有文青銅器の技術系譜は、西からしだいに東へと移ったのであり、その逆ではない。

また凹文の施文技術は、土製鋳型に伴う技法で、鋳造技術の東伝を示している。とくに遼東地区の鄭家窪子例と朝鮮地区南部の有文青銅器には、形態、文様など外観のほか、目にみえない裏面の紐や透かし技術などに共通点が多い。このような一致が偶然に生じる可能性はほとんどないために、遼東から海を通じた技術導入があったと指摘した。前 350 年ごろには、青銅器製作も一定の技術水準と生産規模とに達しており、遼東、朝鮮両地区の間には、青銅製品と工人、製作技術の交流があったとみてよい。

最後にこれらをまとめて、東北アジアにおける青銅器生産の各段階を設定すれば、次のようになる。

1) 東北アジアで最初に青銅製品が出現するのは、商代（紀元前 1100 年ごろ）の時期であり、製品は遼西地区に多いが、遼東地区にも分布している。

2) 一定の消費期間を経過したのち西周末（紀元前 770 年ごろ）までには、遼西地区に中原から青銅器製作技術が導入される。初期段階は、土製鋳型が主で、しだいに石製鋳型も使用する。遼西地区における青銅器一貫生産の確立は、東北アジアの青銅器の流通と使用を促進させ、他地区でも需要と消費とがいつそう増大していった。

3) 春秋中期から遅くとも戦国前期初頭までの間に、東北アジアの各地で石型による鋳造がはじまった。

4) 戦国前期から戦国後期は、東北アジアの青銅器文化が高揚した時期にあたる。西は遼西地区の丘陵、草原から、東は朝鮮地区東部の沿海部まで、多様な青銅器が各地で製作された。

5) 戦国後期を境にして、しだいに青銅器は新生の鉄器にとって替られてゆく。中原に近い西に早くおこり、東へと及んでいった。遼西、遼東の両地区では、戦国後期に鉄器への転換がはじまり、秦代をへて西漢前期にはほとんど鉄器へ交替している。朝鮮地区はやや遅れて、秦から転換がはじまり、西漢中期末にはほぼ鉄器へ移行したとみなせる。ここに利器を中心にして長く榮えた東北アジアの青銅器文化は衰退し、鉄器文化が日ごとに伸長し、発展してゆくのである。

東北式銅劍の形成と展開

中国東北地区では、商代二里岡期の内蒙古朱開溝遺跡から、北方草原地帯のカラスク青銅器文化と関連する環頭刀子や直刃の一鑄式銅劍が出土している。紀元前20世紀末の商代後期に、内蒙古東部から遼西にかけて北方系青銅器文化が分布し、そこに中原製の大型青銅彝器が散発的に出土する。同時期の遼西以東には、青銅彝器を含まない動物飾り柄付き刀子や釧、有蓋斧、有蓋戈、有蓋戚など北方系青銅器が伝わっている。

紀元前10世紀初になると、燕山から遼西地域にかけての広い範囲で、北方系統の動物飾り付き一鑄式有柄銅劍が出現する。その中で遼西は、組立式有茎銅劍の祖形となるT字柄をもつ一鑄式曲刃銅劍を最初に作り始める。続く紀元前10世紀の西周中期には、有柄銅劍と有蓋銅劍とが、地域的なまとまりを形成し分布する。遼西、遼東、吉長、朝鮮半島西北部では、刀子や斧など前段階の青銅器文化を基礎にし、他地域からの影響をう

けながら、少しずつ異なる青銅器文化が形成されてゆく。

紀元前9世紀前半から前8世紀前半の西周後期になると、有柄銅剣と有蓋銅剣に初めて組立式有茎銅剣が加わって、東北地区に3種の銅剣が出揃う。

各地で出土する最初の組立式有茎銅剣は、隣り合う遼西の南山根タイプと遼東の双房タイプとでは形態が異なっている。組立式有茎銅剣の分布を見れば、初現期には遼西から遼東、吉長、朝鮮半島南部まで、数は少ないが遼西タイプが拡散している。遼東と吉長とのつながりが強く、朝鮮半島は遼西との共通点が多い。遼東と吉長では鋒の短い地域的特色のある組立式有茎銅剣を作り、遼西と朝鮮半島では初現期の系譜をひく組立式有茎銅剣を長期にわたって製作・使用した。遼西と遼東の銅剣起源地論争は、小黒石溝8501号墓例の出土、遼西と遼東の東北式銅剣の推移や青銅器文化の変遷からみて、遼西での出現が早いと認定できる。前8世紀中葉の春秋前期には遼東に特異な有茎曲刃銅剣と曲刃銅矛が出現するが、これは遼西とは異なる系譜に連なる可能性が高い。この特異な型式の曲刃銅剣、銅矛は吉長地域でも出土し、北方草原地域との連携を予想させる。

紀元前8世紀中葉から前7世紀前半の春秋前期には、遼西、遼東では新型式の組立式有茎銅剣である十二台營子タイプが作られる。吉長地区で見られた曲刃銅矛は朝鮮半島にも広がり、扶余松菊里や全南の麗川積良洞、宝城鳳陵里など半島最南端まで分布している。

紀元前6世紀前半の春秋後期初には、南洞溝タイプの銅剣が遼東、吉長と朝鮮半島南部まで、散発的に分布している。この段階からT字形の把握部を伴う。

紀元前6世紀後半の春秋後期末には、鄭家窪子タイプの銅剣が新たに出現する。これに伴う有文の特異な青銅器が、朝鮮半島に見られる。海上を通じた直接交流のあった事実を、別の論考で指摘した。

これらをまとめると次のようになる。

1. 紀元前2000年紀に北方草原地帯からカラスク青銅器文化の影響を受けて、中国東北地区に一鑄式有柄銅剣が出現し、紀元前990年の小黒石溝8501石槨墓例につながる。
2. 組立式有茎曲刃銅剣は、一鑄式有柄銅剣と有蓋銅剣との流れの中から、紀元前9世紀初に遼西の南山根などで製作され始め、東北各地へ拡散していく。
3. 紀元前8世紀には十二台營子タイプの有茎曲刃銅剣が遼東から朝鮮半島まで拡散する。出土した石製鑄型からみて、東北アジア各地で青銅器の鑄造が始まった。
4. 十二台營子タイプ以降は、遼西、遼東、吉長、朝鮮で相互に交流しながらも地域色が表れ、独自の青銅器文化を形成し変化を遂げていく。

以上、中国東北地区の組立式曲刃銅剣の成立とその後の展開について論じた。年代は、従来の枠組みよりも古く紀元前9世紀初に遡る点が、明確になった。中国での発掘調査成果や分析研究結果を十分に吟味し、より広い視野にたち旧説を検討する必要がある。アジア全域を含めた新資料やデータにもとづきながら古い歴史像を見直し、新たなパラダイムを構築すべきときにいまや直面している。

燕下都の銅戈

燕下都辛庄頭 30 号墓出土の細形銅戈は、朝鮮製の銅戈でその中でも、早い時期に属するタイプに類例が多い。この銅戈は、燕の滅亡するまえの紀元前 226 年までに埋葬されており、入手時期はすくなくとも 226 年を遡る時期にもとめねばならない。

他の辛庄頭 30 号墓出土品をみると、戦国後期をさかのぼる遺物はみあたらない。また秦や漢代にさがる遺物もともなっていない。出土した金銀製品は、捻体形動物文様を多用し、その年代は紀元前 3 世紀以前のスキタイ文様との関係がふかい。そこで上限は戦国後期をさかのぼらず、下限は燕の滅亡以前とすれば、戦国後期とみなせる。さらに朝鮮の網形銅戈の編年にあてはめると、辛庄頭 30 号墓出土の銅戈は、朝鮮青銅器文化の中葉段階に属する型式である。

当時の東アジアには、北方草原には匈奴、中原には漢族を中心にした戦国七雄が割拠し、東には東胡、朝鮮にはのちに衛氏朝鮮を構成する韓族を中心にした国があった。戦国の七雄のひとつである燕は、中国東北部、いまの河北省から遼寧省にかけて勢力を保っていた時期である。中原にむかつては斉や秦、越などと対抗し、和戦両様のかけひきをおこなっていた。燕の昭王は 28(BC284)年に、秦、楚、韓、魏、趙と合従連衡して斉の都・臨淄を攻撃している。将軍の楽毅は、臨淄をおとし、斉の広い地域を燕の領土に組み込んでいる。

当時の燕は外にむかつては、匈奴や東胡、朝鮮などと対峙していた。燕の将軍・秦開は、紀元前 280 年ごろに北や東に作戦行動をとっている。上谷(河北省懷来県)から襄平(遼寧省遼陽市)にいたる長城を築き、漁陽、右北平、遼西、遼東の諸郡を設置した。こののち燕が滅びる 226 年までのあいだ、燕は東では遼東までを支配、影響下においていたのである。最後に燕は滅びるが、秦軍に攻められた王喜は、いったんは首都の薊をすてて遼東にまで逃げ延びている。このように燕と周辺民族とのあいだには、長城を境にした和戦両様の交渉があったとみてよい。

こうした他民族との戦闘や交流によって、北方草原地帯の金銀製品や東の朝鮮製細形銅戈などを手にいれたのであろう。その傍証として、朝鮮半島にかぎって述べれば、明刀銭、戦国式銅戈、東周式銅劍、鉄製農具など燕の領域でつくられた製品が出土している。明刀銭は、燕で作られた貨幣であり、燕下都からは尖首刀、明刀、貨布などの燕銭約 3 万枚と、韓、魏、趙などの外国貨幣も出土している。燕の昭王時期(BC311~279)には、すでに燕の領域にふくまれていた遼河、渾河流域では、多量の明刀銭が燕の鉄器とともに出土している。また遼東半島の海岸沿いから鴨緑江流域の山岳地帯にかけても、広い範囲に分布する。そのほか朝鮮半島の清川江をこえてさらに東へのびて大同江流域にまで分布し、慈江道龍淵里、吉多洞、吉祥里、雲松里などでは、数千枚の単位で明刀銭が出土している。また平安北道細竹里、慈江道龍淵里などでは、燕の鉄製農具、工具を伴出している。これらの明刀銭を出土する遺跡は、集落址、埋葬址、埋蔵遺構、包含層などである。数千枚を越える単位で埋蔵遺構に一

時的に貯えられており、貨幣として交易に使用された物もあろう。集落内から明刀銭が大量に出土する場合も、同様に交易用と想定してよい。ただ埋葬址からの出土は、副葬された例とみなしてよい。のちには、秦の半両銭を伴う例も存在するが、その下限は衛氏朝鮮の時代にまで下降する。燕の上都、薊と燕の下都から、遼東半島をつうじて朝鮮半島にまで達する明刀銭の道、製品交易ルートがあつた状況が明白になった。東の端は、のちに衛氏朝鮮の領域となる大同江の上流域にまでおよんでいるのである。

同時期の戦国式銅戈は、朝鮮半島で4例が知られている。このうち江界出土例は、内の先端が欠損しているが、援と欄の長い型式である。内に刃をつけ援や胡が長大なタイプには、戟の例がある。本例は戈というより戈と矛を組合せた戟の可能性もある。また伝ピョンヤン出土例は、内に刃をつけ文字を刻んでいる。これまた矛先をともなう戟としての使用が考えられる。他の2例は、秦の戈である。これらの戦国式銅戈は、清川江から大同江にかけての地域で出土し、明刀銭よりもやや東にまで分布している。私が細形銅戈のモデルのひとつとみなす援の脊をとぎだし、左右に樋をつけ、胡の刃部に突起をもつ典型的な燕の戦国式銅戈はこの地域ではいまだ出土していない。また胡の刃部に突起をもつのが燕式戈の特徴であるが、そうした燕式戈はいまだに朝鮮半島からは出土していない。

東周式銅劍は、朝鮮半島から日本列島にかけて出土している。これらは戦国時代から秦の統一時期、前漢初期までのながい時間にわたって流通している。おそらく何度かの波及があつたと想定できるが、戦国後期の例が大同江流域や錦江流域にみられる事実を指摘するにとどめたい。

鉄製農具、工具についても、燕下都遺跡で鋳型や製品が多数出土している。また遼寧省撫順市蓮華堡遺跡からも大量の鉄器が出土している。そのほかにも当時の遼東郡の範囲内にあたる地域では、鋤、鍬、鎌などの農具と、斧、鑿、手斧などの工具が鉄でつくられている。燕の畑作農耕民の東方への進出をしめす有力な資料である。

いっぽう朝鮮半島でも慈江道渭原龍淵洞から鉄製農工具が出土し、400枚ほどの明刀銭をともなう。そのほかに少量の鉄製農工具を出土した例があり、農工具のセットには、鍬と鑿を含んでいる。朝鮮半島でも鉄製農工具を出土する例が増加しつつあり、古く位置づけられるのは、扶余合松里、唐津素々里、長水南陽里などの例である。このうち前二者には、細形銅戈とガラス管玉、多鈕細文鏡が伴っている。このように燕の鑄造鉄器を出土する遺跡には、鉄器出土量の多寡によって質的な違いがある。少ない鉄器を出土する場合にも、燕の領域とその東方にひろがる鴨緑江流域、さらに東の朝鮮半島では差異がみられる。朝鮮半島では、細形銅劍を代表とする青銅器文化のなかに、少量の鉄製農工具を受容している。これにたいして燕と朝鮮半島のあいだに位置する鴨緑江流域では、地域住民が主体となって受容した場合と、燕の勢力拡大ともなって農耕文化複合ともにはいつてきた場合との両者が混在する。

それは鉄製品にかぎらず、明刀銭や戦国式の青銅製武器（戈、劍）、縄蓆文土器など

にも認められる現象である。このように燕と東方世界との交渉をしめす遺物はさまざまである。

次に燕下都の辛庄頭 30 号墓出土の銅戈は、形態、規模、材質、鑄造技術、研磨技法などからみて、朝鮮半島北部で製作された細形銅戈である。朝鮮半島での製作年代は、およそ紀元前 3 世紀中葉にあり、おそくとも紀元前 226 年以前、燕の滅亡よりも前に位置づけられる。

報告者の言うように、この銅戈に柄の下端金具である鑄がともなつたとすれば、この銀象嵌の鑄は中原の燕で製作された部品である。朝鮮製の戈身に、中原製の鑄をとりつけた銅戈といえよう。

この墓には、中原の青銅器や玉器、燕の土器、土製品などを副葬している。それらの製作技術や形態からみると、墓の年代は戦国後期中ごろから後半の時期と想定できる。

墓の規模や構造、土製祭礼用具や金銀象嵌の青銅器などからみて、被葬者は地位や身分の高い人物と想定できよう。

いっぽうで西アジア起源の耳飾りや、北方草原で製作された黄金製品、朝鮮半島製の細形銅戈など燕以外の外来製品を、特別に扱って木棺脇に配列している。

墓の規模や構造、副葬品にみられる土製の祭礼用具、外国製の数々の金銀製品などからみて、この墓に葬られた人物は、紀元前 3 世紀後半に、北方草原の遊牧民や朝鮮半島の人々とも交渉のあった人物、おそらく武人として活躍した男性であったとしてよかろう。想像をめぐらせば、燕の将軍、秦開とともに北方や東方に遠征した武人、あるいは秦開その人かもしれない。北方草原の金銀製品や朝鮮製の細形銅戈などは、戦争での捕獲品か、あるいは平和のしるしとしての贈与品などであろう。戦国時代後期に活躍し、燕の滅びる紀元前 226 年までには死亡して埋葬された、ひとりの男の波瀾にみちた人生を想像しても、大きな誤りはなかろう。

東北青銅器の伝播

中国東北地区では、商代二里岡期の内蒙古朱開溝遺跡から、北方草原地帯のクラスク青銅器文化と関連する環頭刀子や直刃の一鑄式銅劍が出土している。廣川守によると紀元前 2000 年紀末の商代後期に、内蒙古東部から遼西にかけて北方系青銅器が分布し、中原製の大型青銅彝器が散発的に出土するという。同時期の遼西以東には、青銅彝器を含まない動物飾り柄付き刀子や釳、有蓋斧、有蓋戈、有蓋戚など北方系青銅器が伝わっている。

紀元前 1000 年紀初になると、燕山から遼西の広い範囲で、北方系統の動物飾り付き一鑄式銅劍が出現する。続いて紀元前 9 世紀の西周中期には、一鑄式銅劍と有蓋式銅劍とが、地域的なまとまりを形成して分布する。刀子や斧など前段階の青銅器文化を基礎にし、他地域からの影響を受けながら、遼西、遼東、吉長、朝鮮半島西北部では、少しずつ異なる青銅器文化が形成されていく。その中で遼西は、組立式銅劍の祖

形となる曲刃でT字柄をもつ一鑄式銅剣を最初に作り始めている。

紀元前9世紀後半から前8世紀前半の西周後期になると、一鑄式銅剣と有蓋式銅剣、それに組立式銅剣が初めて加わって、中国東北地区に3種の銅剣が出そろふ。各地で出土する最初の組立式銅剣は、隣り合う遼西の南山根タイプと遼東の双房タイプとでは形態が異なる。組立式銅剣の分布を見ると、初現期には遼西から遼東、吉長、朝鮮半島南部まで、数は少ないが遼西タイプが拡散している。遼東と吉長とのつながりが強く、朝鮮半島は遼西との共通点が多い。遼東と吉林では、鋒の短い特色のある組立式銅剣を作り、遼西と朝鮮半島では、初現期の系譜をひく組立式銅剣を作った(図3)。秋山進午と林瀟による遼西と遼東の銅剣起源地論争は、東北式銅剣の推移や青銅器文化の変遷からみて遼西起源が有力である。

紀元前8世紀前半から前7世紀前半の春秋前期には、遼西、遼東では新形式の組立式銅剣である十二台營子タイプが作られる。吉長地区でみる曲刃銅矛は、朝鮮半島に広がり、半島最南端部の全羅南道積良洞まで分布している。

紀元前7世紀前半から前6世紀前半にかけての春秋中期には、烏金塘、南洞溝タイプの銅剣が遼東、吉長と朝鮮半島南部まで、散発的に分布している。この段階からT字形の青銅製把握部をとまなう。

紀元前6世紀前半から前5世紀前半の春秋後期には、鄭家窪子タイプの銅剣があらたに出現する。これにとまなう文様のある特異な青銅器が、海を越えた朝鮮半島中西部の東西里など複数の遺跡でみとめられる。海上を通じた直接交流のあった事実を、別の論考で指摘した。

細形銅剣は、紀元前500年以後の無文土器社会に出現し、支石墓や石棺墓に副葬された。初期の細形銅剣は、上紫浦里の支石墓や東西里の石棺墓から出土している。

凌源三官甸では、出土した中原製銅鼎によって、紀元前5世紀前半から前4世紀初めの戦国前期に年代を同定できた。これ以後は、遼西では組立式銅剣は目立たない存在になる。前4世紀前半から前4世紀末の戦国中期には、遼西では組立式銅剣は少なく、すでに剣は青銅から鉄へと材質転換をはかっている。遼東では旅順官屯子壑周墓タイプの銅剣に代わり、朝鮮半島では八珠鈴などの有文青銅器をとまなう大谷里タイプの細形銅剣が出現する。

前4世紀末から前3世紀末の戦国後期には、遼西ではすでに組立式銅剣はみられず、遼東では尹家村タイプ、吉長では西荒山屯タイプなど棘状突起の低い形態に変化している。朝鮮半島では細形銅矛をとまなう大田炭坊洞や銅斧、銅鑿、細形銅矛と細形銅戈をとまなう九鳳里、草浦里例がある。後二者は、多数の細形銅剣を副葬し、階層差が顕著である。細形銅戈の年代は、燕下都辛庄頭30号墓出土例から紀元前250年頃に副葬された下限年代の一点がある。

戦国後期から秦末にかけては、朝鮮南部では細形の銅剣、銅矛、銅戈が三点セットになる。これに多鈕細文鏡やガラス玉、鉄鑿、鉄斧などがともなう。しかし前漢代の

遺物はともなわないので、漢代以前の戦国から秦の時期までととらえている。

朝鮮半島には、紀元前 8 世紀には中国東北地区から古式銅剣が伝播し、支石墓を営む無文土器社会に拡散していった。その年代が古く紀元前 8～前 9 世紀までさかのぼる点を、千葉基次（千葉、1992）や筆者（岡内、1982）は早くから指摘したが、十分な理解をえられなかったのは残念である。最近では大田比来洞 1 号支石墓出土品などの新出資料によって、この年代観に大きな誤りのない点が明らかになっている。

古式の組立式銅剣は、遼西から遼東、朝鮮半島南部にまで、広がっている。比来洞や金谷洞の銅剣からみて、伝播ルートは遼西から遼東経由で、西北朝鮮を通り西南部朝鮮へ西海岸沿いに拡散した。やがて朝鮮の西北と南部地域とで青銅器文化に差が生じ、朝鮮半島の南北で違いがある曲刃銅剣が作られた。

中原から遼西、朝鮮、日本まで青銅器文化を追究する宮本一夫（宮本、2002）は、松菊里タイプを非殺傷用の宝器とし年代を下げて解釈する。筆者とは松菊里タイプの理解に違いがある。筆者は十二台営子の影響下で金谷洞と同時期に朝鮮南部まで組立式銅剣が波及し、松菊里タイプが成立したとみている。また牛山里などの折れた剣身研磨例や銅鑿、銅鏃としての再利用例からみて、松菊里タイプは実用品だったと考える。

積良洞や徳峙里では、吉長地区の永吉星星哨石棺墓や吉林長蛇山などから曲刃銅矛が伝来している。李健茂（李、1994）によると、細形銅矛の出現前に北方系の曲刃銅矛を導入した事実が明らかになった。この現象一つをとっても、朝鮮半島への青銅器の流入と青銅器文化の変遷過程が、単純ではない事実を理解できよう。

細形銅剣は、朝鮮製組立式銅剣の延長線上に出現し、朝鮮青銅器文化とともに独自の発展をとげたのである。

6 結論

1 北方草原地帯からカラスク青銅器文化の影響を受けて、紀元前二千年紀に中国東北地区に一鑄式銅剣が出現する。

2 組立式銅剣は、一鑄式銅剣と有蓋式銅剣とに遅れて、紀元前 9 世紀初までに遼西の小黒石溝や南山根などで製作され始め、ほどなく東北各地へ拡散していく。

3 遼西での製作開始に続いて、紀元前 8 世紀はじめには十二台営子タイプの銅剣が遼東から朝鮮半島にまで拡散する。石製鑄型の出土からみて、各地で青銅器の鑄造が始まる。

4 十二台営子タイプ以降は、遼西、遼東、吉長、朝鮮で相互に交流しながらも地域色が現れ、独自の青銅器文化を形成し変化をとげていく。

5 朝鮮半島では、支石墓から組立式銅剣が出土している。紀元前 9 世紀はじめの西周後期、おそくとも紀元前 750 年ころの春秋前期には青銅器が製作され始める。

6 松菊里などの古式銅剣は、紀元前 8 世紀初の春秋前期に相当し、遼西の十二台営子タイプと併行する。松菊里の銅斧鑄型などからみて、遼西からの工人移動による青

銅器製作やモデルとなる銅剣の搬入によって組立式銅剣の地元生産を想定できる。朝鮮半島での銅剣生産は、従来の考えよりもかなりさかのぼる。

7 朝鮮半島独自の細形銅剣は、先行する朝鮮製組立式銅剣から変化して紀元前 500 年ころの春秋後期には出現している。組立式銅剣同様に支石墓、石棺墓の副葬品となる。

8 細形銅剣は、型式変化を繰り返しながら、紀元前後まで作られ続けていく。

以上、中国東北地区の組立式銅剣の成立とその後の展開、朝鮮半島への伝播と定着について論じた。朝鮮半島へは遼東の陸上ルートだけでなく海上を通じた交流や、吉長地区からの伝来も明らかになった。また細形銅剣をさかのぼる時期に、すでに朝鮮半島で組立式銅剣を鑄造し、研磨加工し使用していた事実を確認できた。日本列島でも組立式銅剣の鋒を利用した銅鏃や茎を転用した銅鏝が、福岡県今川遺跡で出土している。細形銅剣の伝来以前に古式の組立式銅剣文化が、遼西を起源として朝鮮半島から日本にまで及んでいた事実が明らかとなった。その年代は、従来考えていた枠組みよりも古くさかのぼる点が、今回の再検討でより明確になったといえる。

農耕文化の成立とその後の展開は、年代問題のみでなく新たな視座にたつて資料を再検討する時期に到達し、大きく変貌しつつある。発掘調査成果や分析研究結果を十分に吟味し、より広い視野にたつて旧説を検討する必要がある。アジア全域を含めた新資料やデータに基づきながら、古い歴史像を見直し、新たなパラダイムを構築すべき時に直面している。

朝鮮青銅器の製作技術

朝鮮の金属器製作は、前 7～6 世紀に銅泡や銅鏃、銅斧など小型青銅器の石型鑄造ではじまった。やがて銅剣、銅矛、銅戈などの武器類や多鈕鏡などを鑄造し、次第に独自の発展をとげていった。鎔范と加工技法との双方でみると、剣、矛、戈などは鑄造後の整形加工が著しい特色である。

一方、多鈕鏡や剣装具、車馬具、朝鮮南部の有文青銅器などでみると、鎔范の製作や鑄造技術はかなり高度な技術水準に達していた。また銅矛や銅戈の製作開始に続いて鉄器の製作も始まっている。平安南道大同郡斧山面と甑山郡発見の鉄斧鎔范や会寧五洞、黄海北道松山里の鉄斧などは、早い時期の遺物であろう。

鎔范の発見例が少ないので、青銅器それ自身に残された加工技術を仔細に観察する方法によって、歴史的変遷と地域的な差異とを明らかにする。剣、矛、戈、多鈕鏡、車輿具、馬具などの初期金属器については、独自の発展のあとづけが可能となった。また鎔范は少ないながらも朝鮮各地で発見され、製作地は朝鮮半島内にある。ピョンヤン、黄北・黄州、忠南・大田、東西里、南城里、全南・靈岩、大谷里、慶北・大邱、慶州、咸南・咸興など、それぞれの地方に中心地があり、朝鮮半島内のほぼ全域で製作している。

地域的な特徴を 1 例だけ挙げれば、朝鮮南部では初期には剣、矛、戈が刺突や切断

の武器として使用され、鉄器の出現とともに飾られ大きくなり、しだいに刺突、切断から遠ざかっていった経過を追える。

このような朝鮮初期金属器の製作開始と発展の問題は、朝鮮で発見される遺物のみでは断定できない。周辺地域とりわけ吉林や遼寧など中国東北地区の資料を援用し、また変化の動向をみる上で日本出土の資料を参考にしている。これは朝鮮の初期金属器文化の問題が、中国、倭の金属器文化と密接な関係の上に成立している状況に由来する。言葉をかえれば、有機的な東アジアの金属器文化の一翼をそれぞれが荷っているのである。倭、朝鮮、中国の金属器を問題にする際、こうした東アジア金属器文化の流れを常に心にとめておかねばならない。

異形有文青銅器

朝鮮の農耕社会にも、さまざまな地域特性が存在した点は、朝鮮の地形や気候を思い起こせば十分に予想できる。農耕文化の地域差と共通性とを抜きにしては、青銅器文化はとらえ難い。

再び目を東アジアに転じると、100m 等高線は遼河流域から遼東半島を経て、朝鮮の西海岸づたいに南下し、朝鮮東南部に及んでいる。しかし、興安嶺に接する北部や半島内陸部、東海岸では、発達した平野はみられない。

朝鮮における鎔范、遼寧系 A 式銅剣、異形有文青銅器の出土地、発見地は、100m 等高線以下にはほぼ納まる。その背景には、農業の可能な耕地がひらけ水稻耕作の可能な河川流域平野があり、安定した農耕社会が存在していたためであろう。

陸路をへて遼寧系 A 式銅剣が移入される。遼寧系青銅器文化を受け入れ、さらに朝鮮で青銅器を鑄造したのも、可耕地の平野を基盤とする農耕社会の住民であった。

精緻な凹線文で表現された異形有文青銅器は、ほとんど何の前触れもなく突如として朝鮮半島中西部の忠清道に出現する。初期の異形有文青銅器は、円形蓋形銅器、ラッパ形銅器、防牌形銅飾り、遊環付双鈕銅飾りのように特異な形態を備えている。かつて異形銅器と呼んだように形態のみでなく、用途さえ推定し難い特殊な青銅器である。

これら円形蓋形銅器、ラッパ形銅器、防牌形銅飾りからみて、中国東北地方とりわけ遼寧地方にその起源がある。また、朝鮮中西部の沿岸平野に分布する点からみて、沈陽から遼東半島にかけての青銅器文化が、一部は海路を経て導入されたと考えたい。その鑄造技術は石型と真土型で、遊環には蠟型を使用し、具象文は、原型施文であろう。

異形有文青銅器の時期は、細形銅剣で言えば BI 型式から BII 型式への過渡期にあたり、多鈕鏡でいえば多鈕粗文鏡から多鈕細文鏡への移行期に相当する。暦年代でいえば B.C.300 年を遡らず、B.C.220 年以前の時期であろう。

初期の異形有文青銅器の分布は、現在のところ忠清道に限られる。のちに青銅器文化のセンターとなる朝鮮西北部の大同江下流域や朝鮮東南部の洛東江流域一帯にはみ

られない。

朝鮮中西部での異形有文青銅器の突然の出現は、発達した農耕社会の構成員が、陸路のみでなく海路によっても青銅器を入手しはじめ、より高度な青銅器製作技術を取り入れはじめた状況を示している。朝鮮中西部に導入された有文青銅器の鑄造技術は、多鈕細文鏡や銅剣など在来の青銅器製作にも応用されて拡散していった。多鈕細文鏡や銅利器は朝鮮全体に普及したのに対して、遊環付双鈕銅飾りで代表される一群の有文青銅器群は朝鮮中西部の忠清道に、八珠銅鈴で代表される有文青銅器群は朝鮮南部に分布が限られている。朝鮮中西部とほぼ同質の農耕社会であった朝鮮南部に限って、異形有文青銅器の製作技術が伝わったためであろう。地域によって異なった青銅器が分布する点は、それぞれの青銅器が地域社会の要求に応じて製作され、使用された状況を反映している。

朝鮮中西部を例にあげれば、遊環付双鈕銅飾りを出土した槐亭洞、東西里、南城里の各石棺墓では、いずれも在地の壺形土器と甕形土器とをセットで出土している。これらの土器は、当地域の住居址で普遍的にみられ、日常の飲食生活に使用された土器である。また朝鮮特有の細形銅剣や装身具を身につけた被葬者は、農耕社会のリーダーであったと考えてよい。大田出土の防牌形銅飾りに表現された農業図からみて、異形有文青銅器は当該地域の農耕民の青銅器であったと推察できる。これらの青銅器は、農業用の祭祀に関連して使用された祭祀具であろう。朝鮮中西部や南部の農耕社会には、さまざまな地域特性が存在している。日本への青銅器文化、農耕文化の受容を考える場合も、紀元前3世紀から前2世紀にかけての朝鮮のこの地域特性を抜きにしては論じられない。

次の段階には、凹線文で表現した青銅器は、八珠銅鈴、竿頭筒形銅鈴、棒状双頭銅鈴、交叉双頭銅鈴などへと移っている。地域は、忠清道から東南あるいは西南の方向に拡散し、伝論山、和順大谷里、伝洛東江流域、尚州、入室里などの例がある。

時期は、細形銅剣で言えばBII式銅剣が定形化した段階であり、銅矛や銅戈の出現前である。暦年代で言えば、およそB.C.220年ごろから、B.C.150年ごろまでに相当しよう。

この頃には細隆起線文の表現は、多鈕鏡に 응용されて多鈕細文鏡を誕生させている。伝論山や大谷里出土の多鈕細文鏡は、施文技術も鑄造技術もきわめて高く、精緻な青銅器製作技術を消化している。この段階の異形有文青銅器には、真土製の合せ型が使用され、また八珠銅鈴の双頭渦文は原型施文であろう。

八珠銅鈴に代表される異形有文青銅器群のうち、竿頭筒形銅鈴のみは、やや遅くまで作られ続けるが、他の異形有文青銅器は間もなくすたれてしまう。そして凹線文による施文法は、朝鮮東南部に地域を退縮させながら遺存してゆく。その余影を青銅製剣装具(把握部、柄頭)、あるいは刀子把、有孔十字形金具などに認める。しかしこれらも紀元前後の時期を境として、ほとんどみられなくなって鉄製品に交代してゆく。

ここでは異形有文青銅器の製作技術、施文方法の解明と編年に力点をいたため、農耕社会の地域差とそれに起因する金属器文化の特性については十分に述べられなかった。今回は、朝鮮における青銅器製作技術のうち、蠟型技法と真土製鎔范による鑄造法が存在し、原型による間接施文と鎔范への直接施文が併用されていたという製作技術の一端を明らかにした。朝鮮の独特な異形有文青銅器は、遼寧地方からの技術導入によって製作ははじめ、そのご独自に発展していった。異形有文青銅器の製作技術は、東アジアの青銅器製作技術の中でも地域的な特色をもつ技法と位置づけ得よう。

朝鮮古代の馬車

ピョンヤンを中心とする大同江流域には、1 輦 2 頭だての A 式馬車と二輦一頭だての B 式馬車が存在する。

A 群の馬車は、1 輦 2 頭だてという点で他の馬車とは構造が異なり、戦国時代の要素を色濃くとどめた馬車である。また伴出遺物からみて、上限年代は紀元前 200 年以前にある。戦国時代の馬車を祖型とするが、構成部品の多くは朝鮮独自の固有性を持った形態である。

このようなステイタス・シンボルでもある馬車を持ち、しかも朝鮮独特の形に作って実際に使用し、埋葬された死後の世界に持ちこみ生前の地位と繁栄とを誇示し得た時期は、楽浪郡設置以前の箕氏朝鮮か衛氏朝鮮代においてほかにはない。商（殷）王朝の流れを汲む箕氏朝鮮は、記事に伝説的な要素が多く、古くさかのぼりすぎるおそれがある。そこで A 式馬車は、衛氏朝鮮国の成立前後を契機として整備され、領域内の平安南道、黄海北道一帯に分布したのであろう。この馬車が実際に使用された状況は、車衡金具にのこる紐ずれの痕や、輦首金具とみられる笠頭円筒形金具や乙字形金具、蓋弓帽などに木質が遺存し、小銅鐸に舌を伴う点などから、ほぼ疑いない。A 式馬車を用いた社会集団の中核は、ピョンヤン付近にあつて、主な埋葬地がピョンヤン市楽浪区域一帯であった事実が明らかである。そこで A 群の馬車部品を副葬する墳墓の被葬者は、衛氏朝鮮国の有力者たちであったとみなされる。彼らは独立国家・衛氏朝鮮国の有力者である誇りをもって、A 式の車輿具と馬具とを墓内に副葬したのであろう。

紀元前 190 年の衛氏朝鮮国の時期には、朝鮮独自の車輿具と馬具とをもつ A 式の馬車が整備されて用いられるようになり、紀元前 108 年の楽浪郡設置という政治的な社会変化までに徐々に B 式の馬車へと交替していったのである。出土例からみると紀元後 50 年頃までは、A 式馬車部品の一部が副葬され、B 群の馬車とともに併用されていた可能性がある。

B 群の馬車は、二輦一頭だての効率のよい馬車で、前漢代初頭以後に中原で使用され始めた新式の馬車を摂取し受容したのである。しかし、B 式馬車は A 式馬車に用いられていた在来の旧式馬車部品と、新式の馬車部品との両者を巧みに混用している。

夫租蕨君墓や土城洞 4 号墳などの出土例でみると、紀元前 100 年前後を境として中原の文物が多くもたらされるようになる。「夫租蕨君」の印章が、楽浪郡設置以後に漢

朝から朝鮮土着の葦族の首長に与えられた印章である。したがって、楽浪ほか四郡設置を契機として中原との交易も盛んに行なわれるようになり、また漢朝からの派遣官僚も多くの中原文物をもたらしたと考える。

彼等は出行に際して、当時中原で用いられはじめた新式の 2 轆式 1 頭だての軽快な馬車を文字どおり駆使したことであろう。しかしこの新式馬車は生まれてまだ日も浅かったために、衛氏朝鮮代の旧式馬車を急速かつ完全に駆逐するには至らなかった。したがって B 群は A 群と C 群との過渡的な役割を果たしており、その存続期間は比較的短かったようである。

一轆式の馬車から B 群以降に長く用いられる二轆式の馬車への変化は、こうした楽浪ほか四郡の設置とこれに伴う中国中央派遣官僚や軍人の赴任、家族や商人の渡来に契機を求めておきたい。B 群の馬車を使用したのは、朝鮮土着の有力者であって、中央派遣の高級官僚は B 群の馬車とは異なる漢朝の身分規定にあった中原の馬車を用いたと考える。B 群の馬車部品を副葬した墳墓には、朝鮮土着の有力者が埋葬されているのであって、なかには夫租葦君のような部族の首長クラスも含まれていたのである。逆に中央派遣の高級官僚や軍人は本貫地に帰葬される風習があったため、楽浪郡設置に伴って渡来したであろう漢人の墓とともに、この時期では未だに発見されていない。

B 式馬車を用いた集団は、A 群よりも拡散して平安南道と黄海南道・北道、それに咸鏡南道にまで住んでいたようである。西北朝鮮に分布の中心がある朝鮮独自の車輿具、馬具で、しかも西暦紀元以後には使用されなくなる乙字形金具が咸鏡南道永興邑所羅里遺跡から出土している。これらの車馬具がはるか東方にもたらされた契機は、土城社から出土している点などを考慮に入れば、臨屯・玄菟郡の設置かあるいは玄菟郡の移動によるのであろう。その年代は紀元前 108 年から紀元前 75 年を大きく離れない期間と考える。これらから判断すると、楽浪ほか四郡の設置によって社会生活が一夜にして変るといような急激な変化はなかった。ある程度の在地勢力との妥協のうえに郡県支配が行なわれた状況を示している。

ようやく紀元前 1 世紀後半になって C 群の馬車が副葬されるようになる。

C 式の馬車は、後漢代の壁画墓や画像石墓に数多く表現されている車輿具と馬具との構成である。この段階では A 式の馬車はすっかり姿を消し、古い部品を持つ少数の B 式馬車が残存するほかは、C 式馬車が主流を占めるに至った。現実の社会でも中原の軽快な二轆式 1 頭だての馬車が盛んに使用されるようになったのである。分布は、楽浪郡の管轄下にある平安南道と黄海南・北道のみで、玄菟郡と臨屯郡のあった嶺東には及んでいない。これは C 式の馬車が、真番郡・臨屯郡の廃止と玄菟郡の移動の後に盛行したためであろう。

C 群では従来の土壙墓のほかに、新たに木槨墳からも C 式馬車の部品が出土している。しかも楽浪区域は、ピョンヤンの中心集団が埋葬地としてきた場所で、土壙墓が主体であった墓制から木槨墳へと変化している。この点はピョンヤンを中心とする地

域を拠点とした集団が、従来の土壙墓と異なる木槨墳を埋葬主体とするようになり、中原の文物を積極的にとり入れて墓に持ちこんだ状況を示している。中国系文物を数多く副葬する集団は、おそらく楽浪郡の支配機構と深いかかわりをもつ人々であったに違いない。それは新たに中国から移住してきた漢人や、在地の土着豪族であった五官掾・王吁や楽浪大守掾・王光など郡県の属吏となった人々が含まれている。そして、じゅうらいの土壙墓は、ピョンヤン市の周辺部と黄海道とにわずかに残存している。

さて C 式の馬車を持ち木槨墳に埋葬された人物として高常賢がいる。彼は楽浪嶺東七県中の 1 県である夫租県の県長であった。楽浪郡朝鮮県を本貫地とする在地の有力者であったため、漢朝から任命されて朝鮮県以外の楽浪郡所属県の県長になったのであろう。県令は秩六百石から一千石、県長は秩三百石から五百石であったという。このように平壤市楽浪区域の C 群遺物を出土する木槨墳は、中原文物を積極的に摂取した土着有力者の墓が大半を占め、秩三百石から一千石クラスの官僚の墓を含んでいる。これに対して土壙墓は、土着の有力者であるが、なおも旧来の生活習慣を守り、中国化あるいは漢人化しなかった人々の墓であろう。

この段階は王莽代を中心にして前漢末から後漢中葉に至る期間で、楽浪郡が最も自由活達に機能し、在地勢力も繁栄した時期である。C 群の車輿具、馬具は、生前これを使用できた郡県の官僚として、あるいは地域の有力者としての地位と富とを誇示する威信材であった。

D 群の車輿具と馬具とは、実用品は少なくおもに明器の部品と木製模型とである。この段階から実用の馬車部品の副葬は稀になり、明器がこれにとってかわる。

D 群の車輿具、馬具を副葬した墓は木槨墳と塋室墳とに限られ、時がたつと共に D 群の遺物を出土する木槨墳は減少し、塋室墳がしだいに増加してゆく。

楽浪郡設置後すでに百有余年を経過し、少なくとも 3 代は世代交替している。紆余曲折はあっても長期にわたる郡県支配のもとで、土着の首長や有力者も郡県の支配機構に組み入れられ、ほとんど中国風の生活習慣になじんだのであろう。旧来の習俗を長くとどめる葬制上でも、朝鮮在来の土壙墓がこの段階には作られなくなっていった。

衛氏朝鮮前後から続いたステイタス・シンボルとして馬車部品を副葬する習俗もしだいに薄れ、模型や明器も姿を消す方向へと進んでゆく。その背後には、中原からの新たな乗用牛車の登場や騎馬の風習が及んだのも一因ではあろう。しかし、先秦時代以来盛んであった厚葬の風習がようやくすたれ、また後漢朝の統制による薄葬化が徐々に進行し、東辺の楽浪郡にまで及んだためと考えられる。

朝鮮のガラス玉

馬車と同様に朝鮮青銅器文化を特徴づけるのはガラス玉である。

朝鮮のガラス玉は、鑄造鉄器を伴い、朝鮮青銅器文化Ⅲ期中葉(紀元前 270 年頃)に出現する。ガラス玉は円筒形と多角形の管玉で、色調は単色で象嵌がないから、中国の類例でみると戦国時代前期に上限年代が限られる。鉛—バリウムガラスであり原材

料は中国から輸入した可能性が高い。ガラス管玉の原材料が十分に溶解していない点からみて、輸入した原材料は製品ではなく、熔けきらない半製品あるいは未生成部分を多く含んだガラス塊として運搬したのであろう。また棒巻き付け法や多角柱状の成形法からみて、中国のガラス玉製作方法と密接な系譜関係にある。しかし中国の発掘資料に地域的な偏りがあるため、現状では中国からの伝播発進地域までは特定できない。

今回とりあげた朝鮮出土のガラス管玉は、加工温度が低いため原材料の粉末が十分に熔けずに残っている。気泡が多く単色で、中国の例と比較すれば管玉自体の成形技術は高くない。他に例のない細くて長い形態などをも考慮して、中国産の原材料を用いて朝鮮半島南部で加工成形したガラス玉と判定できる。

朝鮮でのガラス生産は原材料を中国にあおぎ、自ら原材料を生産できないために大きくは発展できなかった。ひき続くソーダガラスやコバルトによる藍色の着色も、西アジア起源で中国からの原材料と技術の導入があった。いっぽう鉄器加工技術はやがて原材料それ自体を生産し、鉄を作る製鉄技術へとつながっていった。朝鮮青銅期文化Ⅳ期とⅤ期には生産工具や武器、車馬具に至るまで鉄器化が進んでく。その背景には燕から導入した鉄器生産技術の確立があったとみてよい。やがて朝鮮全体が鉄器文化に進み、近隣の楽浪郡や倭にまで鉄原材を供給するまでになる。朝鮮青銅期文化Ⅴ期には、弥生Ⅲ期の倭にガラス原材料と製品、ガラス加工技術が朝鮮から海をわたって伝わっている。しかも初期の鉛-バリウムガラスから第2段階のソーダガラスへの転換まで中国から朝鮮、朝鮮から日本への順に移り変わって行く。ガラス原材料とガラス製品、ガラス加工技術もこうした東アジア全体の歴史的産物として捉える必要がある。

朝鮮最初のガラス加工技術の導入は、鑄造鉄器文化と密接な関係がある。燕の鑄造鉄器が朝鮮で出土している事実からみて、中国東北部、燕の領域から技術を導入したのであろう。まず鉄器を加工するための高温を維持する技術や設備を獲得し、ついでガラスを加工する技術も燕を経由して導入し定着させたと考える。朝鮮では青銅器鑄造技術を確立して一定の時を経過していた。長時間の高温処理が必要な鉄器加工技術とともにガラス加工技術を受け入れるまでに朝鮮の社会や技術が発展していた点にも、歴史的な意義がある。鉄器加工技術とガラス加工技術の導入時期は、戦国中期の前270年ころに相当する。この時期は燕の将軍・秦閔の東方侵略とほぼ一致する。おそらく戦国時代中期の織烈な中原の争いが遼東の燕国にまで波及し、新たな東方への侵略となって現れたのであろう。この中原の波は東アジア全体を揺り動かす何度目かの波動となった。侵略と共に燕の鉄器加工技術は東方に拡散し、時をおかずにガラス加工技術も東方へと伝播したのである。

朝鮮出土のガラス管玉は、朝鮮で初めて出現したガラス製品というばかりでなく、西アジアと日本とを両端にして、西アジアと東アジアとのダイナミックな歴史展開をと

らえる資料としても重要な意義をもつ遺物である。

朝鮮と倭の細形銅戈

- 1) 朝鮮製細形銅戈は、機能的な変化に基づきⅠ式、Ⅱ式、Ⅲ式の3型式に分類できる。朝鮮製Ⅰ式細形銅戈には変異が多く、広い範囲で長く製作、使用された実戦用の武器である。
- 2) 朝鮮製細形銅戈は、出土数に粗密はあるが、西北朝鮮と東北朝鮮を除く各地に分布し、地域的な特色を備えている。地域差は、青銅器を保有した社会や文化の相違を示している。
- 3) 大別すると、半島の北部と南部とで青銅器文化に差異がある。中でも大同江流域のB地域、錦江流域のD地域、栄山江流域のE地域、洛東江流域のF地域、慶州盆地のG地域とは、特色のある朝鮮製細形銅戈を製作、使用している。
- 4) Ⅰ式朝鮮製細形銅戈は、首長が管理し有事に戦士が用いる実戦用武器で、武力の象徴でもあった。後に武威や権威の象徴となり、細形銅戈Ⅱ式からⅢ式へと変化した。
- 5) 各型式の分布をみると、Ⅰ型式は朝鮮半島全域に広がり、Ⅱ型式は半島南部の洛東江流域・F地域と慶州盆地・G地域とに分布し、Ⅲ型式はF地域にのみ分布する。
- 6) 洛東江流域のF地域は、文様のあるⅠ式、Ⅱ式、Ⅲ式銅戈を出土する。細形銅戈の装飾化、儀器化の傾向をしめし、倭の青銅武器（劍、矛、戈）の儀器化、大型化につながる要素をそなえている。この地域から日本製中広形銅戈や中広形銅矛が複数出土しており、北部九州との密接な連携がうかがえる。
- 7) B地域の大同江流域は、先行する遼寧系の独自の青銅器文化を持ち、のちにA式馬車に示される中原系の青銅器文化を導入して、衛氏朝鮮のような王朝国家を成立させていた。
- 8) 朝鮮製細形銅戈にみられる地域差は、北の畑作、南の水稻作など生産基盤の違いによって生み出された社会構造や統治組織の差異に基づくのであろう。地域的な集団は首長層によって組織かされ、それぞれの社会組織にまとまって、クニを成立させていった。
- 9) 小さなクニを統合していく際に、銅劍や銅矛とともに朝鮮製細形銅戈も実戦用の兵器としてなくてはならない武器であった。劍、矛、戈に代表される実戦用武器が出現する現象は、首長が宗教、祭祀的な権威から戦闘的な武力を示す武人的首長へと変質した事実を示している。
- 10) やがて武威を示すだけの朝鮮製細形銅戈に変化した背景には、青銅製から鉄製へと武器が質的転換を遂げたためである。そこには燕の鉄器文化の継続的な影響が加わり、やがて秦・漢に代表される鉄器社会へと傾斜していく朝鮮半島の無紋土器社会やクニグニの一端を見て取れるのである。

弥生の青銅器

倭出土の輸入青銅器をみると、朝鮮で出土する劍、矛、戈、鏡、銅釧、銅釦、馬鐸、

蓋弓帽や貨幣を含む朝鮮の青銅器と種類がよく一致する。また出現の順序をみても、武器では遼寧式銅劍—細形銅劍—鉄劍・鉄刀、銅鏡では多鈕細文鏡—前漢鏡—仿製鏡のように、遼寧系—朝鮮系—中国系—倭製の変遷をたどる。おおむね東アジアの青銅器の展開や朝鮮青銅器の変遷は、倭でも大筋で参考にできる。

また、従来考えていたよりも早い段階の弥生早期から、青銅器を断続的に導入していた可能性が強い。青銅器は、弥生 I 期末から倭での铸造がはじまり、その倭風化がしだいに進んでゆく。細形銅劍—仿製細形銅劍—中細形銅劍—平形銅劍、細形銅矛—中細形銅矛—広形銅矛、細形銅戈—中細形銅戈・近畿式銅戈—広形銅戈、朝鮮式小銅鐸—銅鐸、前漢鏡—朝鮮製仿製鏡—小型仿製鏡、楽浪系円形銅釧—仿製円環形銅釧—有鉤銅釧などの変化がある。ところで日本産の銅は、のちの古墳時代になってもまだ産出例がなく、弥生時代に国産銅を生産しえた可能性は低い。弥生時代の銅は、輸入青銅製品の铸つぶしと、原料となる銅や錫、鉛の地金の輸入に依存していたと予測できる。

最近の鉛同位体比法によると、小型仿製鏡には朝鮮産の鉛を使った例と、中国産の鉛を使った例とがある。一部の細形銅劍には倭の仿製品があり、中細形以後の青銅武器は確実に倭製で、前漢鏡などと同じ中国産の銅と鉛を使っている。銅鐸は、泊と神於の例が朝鮮産の鉛を含み、他の銅鐸は中国産の鉛という。かつて銅鐸は朝鮮製の青銅武器を铸つぶして铸造したと考えてきたが、その可能性はうすくなりつつある。むしろ朝鮮製の青銅器は、畿内には九州北部ほど多くは持ちこまれていなかった可能性がある。

九州と畿内とでは青銅器のあり方に違いがある事実はよく知られている。前者では劍、矛、戈、鏡などが埋葬址から出土し、後者では銅鐸が埋納址から発見される。両地域に共通する舶載青銅器第 II 期の多鈕細文鏡でも、九州では武器と共に埋葬址から出土し、畿内では銅鐸と共に埋納址から出土している。

ここでは畿内と九州とで共通して出土する銅釧と貨幣とについて比較してみよう。

銅釧は九州でも畿内でも埋葬址からの出土が多い。出土遺構をさぐると、対馬では箱式石棺、九州北部では甕棺、畿内では方形周溝墓の木棺から出土する。同じ埋葬址でも、対馬、九州北部、畿内と地域によって遺構の種類が異なっている。銅釧は身体着用品であるが、埋葬や習俗には違いのあった実態が予想できる。

つぎに貨幣のうち、製作年代の古い輸入青銅器第 III 期の半両銭と五銖銭とは、もっぱら九州北部とその周辺地域で出土し、畿内の古い時期には未発見である。輸入青銅器第 IV 期の貨泉になると九州北部から東方へ拡散し、瀬戸内をへて畿内にまで波及する。その分布圏をみると、九州では福岡平野を中心に半径 150km の円圏内に分布し、畿内では大阪平野を中心にやはり半径 150km の円圏内に納まる。先述した銅釧の分布とあわせると、九州北部と畿内とでふたつの分布圏を構成する。武器、鏡をのぞいた貨幣や蓋弓帽などの輸入青銅器全体をみると、九州分布圏と畿内分布圏との二者が、

輸入青銅器第Ⅱ期以降は並存していたとしてよかろう。その上で両地域は埋葬のしかたや祭祀の風習でも相違があった事実を示している。

最後に弥生の輸入青銅器は、どのような役割を果たしたかを時期ごとにまとめておこう。

まず第Ⅰ期の輸入青銅器の剣、鏃、鏃は、実用品ではあったが数は少なく貴重な金属として再加工して大切に使われた。朝鮮半島に面した玄海灘沿岸に分布する遼寧系青銅器の末裔である。日本の青銅器が東アジアの一群に属し、そのはじまりが遼寧系青銅器に関連する事実を示す遺物として重要である。

第Ⅱ期の輸入青銅器は、武器や鏡などと共に導入した朝鮮製青銅器で、銅鉞などの実用品を含んでいる。九州北部での分布が主であるが、点と点とを線をつないで東伝し、畿内にまで及んでいる。初期の倭製武器や銅鐸には朝鮮産の鉛を含んでおり、朝鮮製青銅器を鋳つぶして銅鐸原料としたと想定できる。

第Ⅲ期には、初めて中国製品が加わる。前漢鏡などと共に出土する蓋弓帽、四葉座飾り金具などは、有力者を示す珍しく貴重な品であった。朝鮮製、中国製の青銅器を数多く導入した時期といえる。分布は九州北部に多いが、しだいに周辺平野や東方へも瀬戸内海ぞいに面的に広がり、畿内におよぶ。銅鐸や日本製の剣、矛、戈には前漢代の華北産の鉛を含む例がある。これは中国製青銅器を鋳つぶして倭製青銅器を製作した状況を反映している。

第Ⅳ期には各種の朝鮮製、中国製の青銅器を輸入したほかに、青銅原料を輸入した可能性がある。青銅器は九州から畿内にまで分布し、各地の平野ごとにまとまりがある。この時期には貨泉・貨布などの新しい貨幣や銅釧など各種の青銅製品を導入して、九州北部と畿内とで、明確に異なる分布圏を構成する。

第Ⅴ期は最終段階で、もはや青銅器は祭祀や武器の主体ではなくなっていく。青銅製品は全体に少なくなり、祭りの銅器は統合されつつあった。その中で特異なのは対馬である。対馬出土の小型青銅器は朝鮮南部製であるが、青銅器の原料となるクズ銅である。文化の中心地である畿内や九州北部では、利器は徹に交代して銅を使わなくなりつつあったのに、周縁地域で、しかも外部（朝鮮、中国）から不断に銅を入手できた地域に、こうした特異な現象がのこったのであろう。

吉野ヶ里

紀元前 100 年頃は、朝鮮では青銅の剣から鉄の剣へと移り替わる時期にあたり、青銅の武器としては終末期に近い段階で、一鑄式有柄銅剣が作られている。吉野ヶ里墳丘墓の被葬者は、船載の銅剣やガラス玉を墓にまで持ち込んで埋葬されている。こうした貴重な舶来品は、持つ人の富や権力の象徴にもなっていた。しかし、いまだに倭では銅剣は単なる飾りや象徴だけではない。刺せば血が出る殺人用の武器として戦いにも使われていたのである。まだ戦いの武器として、銅剣が実際に使われていた例が埋葬址から発掘されている。

吉野ヶ里の 1007 号甕棺墓出土の銅剣は、先端が折れてなくなっている。北部九州から瀬戸内海にかけて、銅剣の切っ先が折れて死者の体の中に残ったまま埋葬された例がいくつか報告されている。当時の倭、つまり卑弥呼の出現する前の倭国は、百余国あるいは三十余国に分かれていたという。これらの国々が争った状況も中国の歴史書に記されている。

吉野ヶ里の銅剣も戦いで使われた可能性がある。争いがあったからこそ弥生時代の早い段階から大きな溝を掘って集落を囲い、柵を巡らせて防禦を固めたのであろう。やや時期の下がる吉野ヶ里の集落も溝や物見櫓を築いており、警戒を怠らなかった状況がよみとれる。

吉野ヶ里墳丘墓から出土した銅剣やガラス玉は、朝鮮西南部地方で製作され、朝鮮南部の沿岸地方を経由し、玄海灘を渡って吉野ヶ里にもたらされたのであろう。

同時代の朝鮮半島は、西北部朝鮮に楽浪郡が設置されていたものの、その周縁の地。韓の国々は倭と大きな違いはなかったと考える。朝鮮南部沿岸の遺跡から、倭製の土器や青銅器が出土している点を考えあわせれば、両地域はほぼ似たような段階、社会状況にあったのであろう。

弥生Ⅳ期になると朝鮮製青銅器は、用途不明品が多くなる。中国からは後漢鏡、貨泉、貨布、五銖銭などがもたらされる。鉄器は鉄刃農具が出現する。木器の加工具も鉄器化し、武器や工具は銅から鉄におきかわり、ますます鉄器化が進行している。長大化した中広形や広形銅矛は、海をこえて朝鮮南部の慶尚南道固城東外洞、金海良洞里、伝金海明法洞などで出土している。水田は地形に応じて小は 20 m²以下から大は 500 m²を超える規模まで各面積の水田が出現し、面積や形態では近世の水田と違くない。集落は濠や柵で固まれた佐賀県吉野ヶ里のような大規模集落となり、その中心に有力者や王の居館が建てられ、古墳時代の集落へと変貌していく。墓は盛土をもつ墳丘墓が出現し、複数の埋葬施設を封土内に設けるが、やがて古墳へと展開する。ムラやクニの統合過程では、血なまぐさい戦いがあった事実を首のない人骨や石鏃を身体中に射こまれた遺骸などが示している。国内の統一や戦争に、黄河流域の中国王朝の權威を利用しようとした行為は、倭の奴国や卑弥呼、臺与のように漢や魏への遣使朝貢や救援依頼の様子などから知りえる。日本への政治的、文化的影響力は、朝鮮から中国へと大きく転換したのである。

このように弥生時代は、稲作農業がはじまり倭は徐々に発展をつづけ、やがて東アジアの国際舞台に登場し、古代国家を形成しはじめた重要なしかも激動の時代であったのである。朝鮮や倭では畑作や水稻農耕を行い、同じ程度の社会や生活、文化をもち、政治的なレベルでも大きな開きはなかったと推測する。こうした動きの中から朝鮮半島南部では馬韓、弁韓、辰韓などの小国家が形成され、倭では北部九州や畿内に国々がつくられ、しだいに連合や統合が進みつつあったのである。女王・卑彌呼のひきいる弥馬台国や古墳時代の国家の登場は、目前にせまっていたといえよう。

結 論

1 紀元前 11 世紀の商末周初に、中国東北地区から西北朝鮮に刀子，斧，釵などの青銅器が伝播する。西北朝鮮における青銅器の使用は、紀元前 800 年代後半までさかのぼる。

2 組立式曲刃銅劍は、紀元前 9 世紀初に遼西の南山根や北山嘴などで製作され始め、複数型式の劍身形態がある。ほどなく遼西以東の東北各地や朝鮮半島を含めた地域へ拡散していく。

3 紀元前 8 世紀には、AⅡ式銅劍の十二台營子タイプが遼西から朝鮮半島にまで広がり、遼西以外でも青銅器の鑄造が始まる。このため遼西，遼東，吉長，朝鮮で相互に交流しながらも地域色が表われ、独自の青銅器文化を形成し変化を遂げていく。

4 朝鮮半島では、紀元前 800 年代後半の西周後期，遅くとも紀元前 770 年の春秋前期には朝鮮製組立式曲刃銅劍が製作され始め，支石墓から副葬品として出土する。

5 松菊里などの古式銅劍は，遼西の十二台營子タイプと併行し紀元前 770 年以降の春秋前期に相当する。松菊里の銅斧鑄型や組立式曲刃銅劍などからみて，遼西からの工人の移動による地元生産を想定できる。朝鮮の南北では，銅劍型式に相違が認められる。

6 朝鮮半島独自の細形銅劍は，先行する朝鮮製組立式曲刃銅劍から変化して紀元前 500 年ころの春秋後期には出現し，当初から三種以上の多様な型式に分かれている。

7 紀元前 475 年ごろから前 320 年以前までは，組立式曲刃銅劍と細型銅劍とが並存する。細形銅劍は，地域差をもち型式変化を繰り返しながら紀元後まで作られ続ける。

8 朝鮮西部の異形有文青銅器を伴う一群は，中国東北地区の十二台營子，孫家溝，鄭家窪子，三官甸などとの海上ルートによる交流を想定できる。しかし異形有文青銅器や文様を沈線や凹文で表わす鑄造技術は，なぜか日本列島には伝わらない。

9 細形銅劍の日本列島への伝播は，紀元前 320 年以降の銅劍，銅矛，銅戈のセットが揃う大谷里や九鳳里の時期まで待たねばならなかった。

10 細形銅劍が朝鮮独自の車馬具を伴うのは，秦末漢初の紀元前 200 年ころの衛氏朝鮮前後の時期に比定した。そのごは紀元前 108 年に楽浪郡が設置され，木棺墓から細形銅劍が前漢鏡を伴って出土する。やがて銅劍から鉄劍への材質転換が進行し，銅劍の終焉を迎えるのである。

11 倭では朝鮮半島南部から紀元前 400 年ころに初期の青銅器が伝わる。やがて挑戦の青銅器文化とは一線を画して、倭製青銅器文化を展開させる。前漢鏡を輸入しはじめる段階から北部九州と畿内とでは差異が現れる。やがて長大な青銅祭器を作るようになると劍，矛，戈などの武器形祭器は九州で、突線鈕式銅鐸は近畿で作るようになる。その背景には朝鮮からの鉄素材や鉄器加工技術の渡来があった。

12 やがて畿内が一歩抜きん出て、弥生から古墳時代へと転換していくのである。

以上、中国東北地区の組立式曲刃銅劍の成立と展開、朝鮮半島への伝播と定着、その後の日本列島への拡散、日本列島内での独自の展開などについて論じた。朝鮮半島へは遼東からの陸上ルートばかりでなく西海岸沿いの海上ルートを通じた交流や、吉長地区からの伝来も明らかになった。また紀元前 8 世紀には、朝鮮半島で組立式曲刃銅劍を鑄造し、研磨加工して使用していた事実を確認できた。日本列島でも組立式曲刃銅劍の鋒を利用した銅鏃や茎を転用した抉り溝つき銅鏃が、福岡県今川遺跡で出土している。細形銅劍の伝来以前に組立式曲刃銅劍文化が、遼西を起源として朝鮮半島から日本にまで及んでいたのである。その年代は、従来考えていた枠組みよりもはるかに古く、上限は紀元前 8 世紀にまでさかのぼる点が、今回の再検討で明確になった。

弥生時代の社会と文化は、年代問題のみでなく弥生社会全体の捉え方とその後の展開自体が大きく変貌しつつある。水田や畑の生産遺構や栽培作物、青銅や鉄の生産、加工技術と製品や道具、集落や埋葬址、社会構成など、朝鮮や中国を視野に入れて旧説を再検討すべき時期に到達している。われわれは日本列島の発掘調査成果や分析研究結果を十分に吟味し、アジア全域を含めた新資料やデータに基づきながら、古い歴史像を見直し、新たなパラダイムを構築すべき時にいまや直面しているといえよう。

ここまで 20 日 12 時 30 分